

佐渡 裕 (指揮) インタビュー

—「バースデーコンサート」にご出演いただき、ありがとうございます。開館した直後の1961年4月26日～5月7日にニューヨーク・フィルハーモニックが来日し、東京文化会館では3公演開催。指揮はレナード・バーンスタインと小澤征爾でした。

僕は1961年5月13日に生まれました。その直前までバーンスタイン先生が初めて来日されていました。副指揮者は小澤征爾先生で、黛敏郎さんの「饗宴」を指揮しています。後に僕に大きな影響を与える人たちが東京文化会館の開館時に大きく関わっていて、今回、60周年のバースデーコンサートに呼ばれたのは、もの凄く縁を感じるんですね。



Kanreki happy!!

—東京文化会館の印象はいかがでしょうか？

僕は京都生まれなので、東京文化会館に聴きに行くというのは非常に憧れたものがありました。小澤先生が指揮する新日本フィルハーモニー交響楽団の演奏を聴くために、子供の頃に夜行バスに乗って東京に行ったこともあります。

東京文化会館にはバーンスタインが立ち、カラヤンが立ち、僕は聴きに行けなかったけれどクライバーがオペラを振り、そうした歴史があるということを行く度に感じますし、あの舞台に僕が立てるんだといつもすごく嬉しかったですね。

フランスにいた時に、車での移動中にラジオでクラシックをよく聴いていたんです。ある日、演奏後の拍手の音を聴いて「東京文化会館の音がしている」と思ったら、本当に東京文化会館でのコンサートだったんですよ。残響がすごく多いわけじゃないけど、もの凄くクリアで、密度がある音圧があり、非常に演奏しやすいのです。世界を代表するアーティストたちがこの舞台に好んで立つ理由が、あの舞台に立つと、もの凄く感じるものがありますし、客席で聴いていてもそれを感じることができますね。

—「東京文化会館アーカイブ」によると、東京文化会館で初めて指揮されたのは、1990年9月、新日本フィルハーモニー交響楽団定期演奏会で、マーラーの交響曲第6番「悲劇的」でした。その前に小澤征爾さんが指揮した「サロメ」に副指揮者で入っています。

鮮明に覚えているのは、1991年10月の新日本フィル定期ですね。朝比奈隆先生が体調不良となり、急遽代役で指揮をしました。オファーを受けた時は海外にいて、リハーサル時間もほとんど取れない状況の中での急な依頼でした。オーケストラから電話がかかってきて「ファーストクラスでいいから、空いている便に乗って帰ってきて」と言われ「遂にファーストクラスに乗れる！」と思ったものの、調べたら全部満席で、結局エコノミークラスに乗って帰ることになったことをすごく覚えていますね。

—都響の印象はいかがでしょうか。

都響を振るのは久しぶりですね。要所要所に非常に素晴らしいプレーヤーがいます。サッカーで例えるとフォワードもすごいけど、ミッドフィルダーやディフェンダーにもスターがいます。そして、個々の奏者のレベルだけではなく、組織力もすごく成熟しているオーケストラだと思います。

—後半演奏する「新世界交響曲」は1961年4月7日の開館披露演奏会で演奏された曲ですが、佐渡さんは何度も演奏されていますよね。

シンフォニーではベートーヴェンの第九が圧倒的に多いですが、新世界も何度も振っています。

僕が30代の中頃、1990年代に日本センチュリー交響楽団の首席客演指揮者だった時、成人の日に前半ピアノ協奏曲、後半新世界というプログラムを毎年やりましたが、その頃、朝比奈隆先生と大阪フィルも成人の日に同じ組み合わせでやっていたんですよ。老舗の組み合わせに喧嘩を売った形になりましたが、朝比奈先生はすごくかわいがってくださいました。



また、僕が監督を務める兵庫芸術文化センター管弦楽団が結成時一番最初に練習した曲でもあります。最初の4小節で止まってしまったけど。

新世界は、ベルリン・ドイツ交響楽団とのCDがあります。コンサートを収録して、終演後に録り直しを予定していたけど、プロデューサーが本番が素晴らしかったと言い、録り直しをしなかった思い出のCDです。というわけで、僕の中ではやはり十八番の一つと言えるでしょうね。

—佐渡さんは芸術監督を務められている兵庫県立芸術文化センターでの事業などを通じ、教育活動も積極的にされています。

子供たちに教えるという意識は若い頃はあまりなかったと思うのです。ただ、僕自身も何かお返しできることがあったらと思い始めた頃に、バーンスタイン先生の遺族の後押しもあり、40歳を迎える直前の1999年から「佐渡裕のヤングピープルズコンサート」を始め、次の世代に何かを残すことは当然のことだと思うようになってきました。

そして、兵庫県立芸術文化センターとの仕事が始まる頃には、劇場やコンサートホールは壮大な交響曲や豪華なオペラを演奏するだけではやっぱり意味がないと思ったんです。そこで最初に始めたのが「スーパーキッズオーケストラ」でした。開館する2年前、2003年の夏です。親子で聴きに来るお客さんも多いです、とてもやりがいのあるオーケストラです。

また、今でも吹奏楽部のクリニックをするんですけど、そういう時間ってものすごく意味があるような気がします。

そうしたことは教育にも熱心に取り組まれた小澤先生、バーンスタイン先生、この二人から僕自身に与えられたすごく大きな宝物だし、自分の中でも最も大事な役目のひとつだと思って活動しています。

—最後にコンサートにかける意気込みをお願いします。

子供の頃から憧れ、この舞台に立ちたいと思っていました。実際にそうなったら、偉大なアーティスト達が演奏してきた歴史を感じるし、上野に行くこと自体が、日本の文化を育てている中心に行くような気持ちを持ってきました。いろんな不思議な縁で、私も60歳となる今年、この劇場の60歳のお祝いの指揮台に上がることを非常に光栄に思います。この劇場が、70年、80年、100年と引き続き魅力のある場所であってほしいと願いを込めて演奏したいと思います。